

高齢者では脳卒中予防のための低用量アスピリン、便益よりもリスク大きく

低用量アスピリンは、脳卒中の予防に用いられる。高齢者における虚血性脳卒中の抑制と頭蓋内出血の増加とのバランスについては明らかにされていない。本研究では、連日低用量アスピリンを服用している健康な高齢者を対象に、虚血性脳卒中と頭蓋内出血のリスクについて検討した。

オーストラリアと米国の心臓血管病の既往がない 70 歳以上の高齢者 19,114 例（女性 56.4%、年齢中央値 74 歳）を対象に無作為化二重盲検比較試験を実施した。毎日 100mg のアスピリン投与群（9,525 例）とプラセボ群（9,589 例）に割り付け、追跡期間中央値は 4.7 年であった。結果、アスピリン群において、虚血性脳卒中の有意な減少は認められなかった（プラセボ群と比較したハザード比 0.89）。一方で、頭蓋内出血はプラセボ群（79 例 [0.8%]）と比較してアスピリン群（108 例 [1.1%]）で有意に増加した（ハザード比 1.38）。出血性脳卒中はアスピリン群で 49 例（0.5%）、プラセボ群で 37 例（0.4%）認められた（ハザード比 1.33）。

したがって、低用量アスピリンの連日投与で虚血性脳卒中の有意な減少は認められず、一方で頭蓋内出血は有意に増加することが示された。これらの所見は、高齢者が転倒による外傷で頭蓋内出血をおこしやすいことと関連があるのかもしれない。

出典：Journal of the American Medical Association. Network Open. 2023 Jul 3; 6(7): e2325803.